

## 第六章 光る源氏の物語 女三の宮の六条院降嫁

[第一段 女三の宮、六条院に降嫁]

かくて(こうして正月が過ぎて)、如月の十余日に(二月十日過ぎに)、朱雀院の姫宮(朱雀院の三の宮が)、六条院へ渡りたまふ(六条院に輿入れなさいます)。この院にも(此方の六条院でも)、御心まうけ世の常ならず(姫宮をお迎え申す御準備は並大抵ではなく)、若菜参りし西の放出に御帳立てて(長寿祝いに若菜を召し上がった寝殿西側の張り出し母屋に姫宮の御座として御帳台が組み立てられ)、\*そなたの一、二の対、渡殿かけて(西の対の第一屋と第二屋と渡り廊下までを)、女房の局々まで(上臈女房の各小部屋を含めて)、こまかにしつらひ磨かせたまへり(姫宮の付き人用に細かな気配りで部屋割りされ掃除させ為さっていらっしやいました)。\*「そなたの一、二の対、渡殿かけて」は注に<六条院の南の御殿には西の対が二棟あり、寝殿に近いほうから第一、第二の対と呼んだ。その対と渡殿にかけて、女三の宮に付き従って来た女房の局を設けた。>とある。

内裏に参りたまふ人の作法をまねびて(宮中に入内なさる姫君の作法に習って)、かの院よりも御調度など運ばる(朱雀院からも御家具類が運び込まれます)。渡りたまふ儀式(その輿入れ行列の盛大さは)、言へばさらなり(大変なものでした)。

御送りに(御送りの随行に)、上達部などあまた参りたまふ(高官たちが多数参列なさいます)。かの家司望みたまひし大納言も(あの臣下の礼を持って姫宮をお迎え申したいと結婚を望んでいた藤大納言も)、やすからず思ひながらさぶらひたまふ(心穏やかならずも付き従いなさいます)。

御車寄せたる所に(姫宮の御車が正面階段に寄せた所に)、院渡りたまひて(六条院がお出迎えなさって)、下ろしたてまつりたまふなども(姫宮を抱き下ろし申しなさるのは)、例には違ひたることどもなり(普通とは違う輿入れの仕方でした)。

\*ただ人におはすれば(源氏殿は自身が一世源氏であり今上帝からは准太上天皇の処遇を賜わるものの、家格としての臣下を自覚していらっしやるので)、よろづのこと限りありて(御所には万事に遠慮があつて)、内裏参りにも似ず(御輿参内の様式ほど格式張らず)、\*婿の大君といはむにもこと違ひて(嫁の実家を敬って婿通いする御大尽というのとも違つて)、めづらしき御仲のあはひどもになむ(この御夫婦は珍しい取り合わせの御身分同士です)。\*「ただうど」は<帝や皇族に対して、人臣をさす>と古語辞典にある。また、注には<源氏は准太上天皇となったとはいえ、皇族には復帰しておらず、臣下の身分のままであった。『細流抄』は「草子地也」と指摘。『全集』は「准太上天皇という源氏の位は、史実にはない虚構であり、読者が奇異に感じるおそれがある。物語に現実感を与えるために、語り手に批評させた」と注す。>とある。この「准太上天皇」というのは、当時の地位や身分に対する基本的な認識が薄い私のような者にとっては、その意味するところの解釈に手間取る、全く面倒な設定だ。一度決定された臣籍降下は切実な台所事情に拠るもので政策ではないから、状況変化で覆るべき事項ではないのだろう。しかし、「天皇」は<王>の概念そのもので、国家統合・中央集権の絶対的象徴だ。私は、源氏殿は個人として帝位を襲わない引退者として王籍復古した、と思う。本文の二章七段にも、春宮の「御けしき」として「人柄よろしとて、ただ人は限りあるを、なほ、しか思し立つことならば、かの六条院にこそ親さまに譲りきこえさせたまはめ」とあり、それが朱雀院の本心を纏め

たものように語られていた、かと思う。したがって、「ただ人におはすれば」は源氏殿が自身の生き方として、またその自覚に於いて自身を「臣下たる源氏」と心得ていた、と読みたい。確かに「中に思すれば」などの言い方は無いが、源氏殿は個人的には王籍に戻ったものの、家筋としては王族ではないので、臣下の家格で姫宮を迎えたのであり、それは源氏殿の考え次第の事柄だった、かと思う。また、そもそもだが、当時の読者はこの六条院の事情の理解に本当に混乱したのだろうか。確かなのは、当時の人々も、「帝位」こそは権力の源泉たる權威の象徴として厳格な資格認識があったらうし、その資格こそは「王族」に他ならない。しかし、種が尽きると、例えば確か、継体天皇は一豪族の立場から王族復帰し帝位を襲った、と記憶する。出家からの還俗などは御都合主義も良い所だ。つまり、表向きの厳しい体裁とは裏腹に、内部抗争では武力と財力を背景に敵対勢力を如何言い包められるかが全てという規範の緩さだ。当たり前だ。権力当事者自身が権威教条に雁字搦めになっていたのでは、現実政治の物流と人心を何一つ差配できない。そして、当時の宮廷読者は皆が権力当事者および其の周辺だ。恐らく其の読者たちは、この記事を「源氏殿の心構え」と読んだ、のだろう。\*「むこのおほきみ」は注に「婿の大君」は、催馬楽「我家」の「我家は 帷帳も 垂れたるを 大君来ませ 婿にせむ 御肴に 何よけむ 鮑榮螺か 石陰子よけむ」を連想させる表現。>とある。通い婚が習わしというのも、貴族や高貴な家の女に対してのもので、その家の格式を重んじる姿勢を婿たるものは示さねばならない、という意味なのだろう。庶民がくつついたり、くつつけられたりするのに、全くとは言わないが厳密な流儀などないかと思う。しかし、難文が続く。

## [第二段 結婚の儀盛大に催さる]

\*三日がほど(御輿入れから三日間に渡る祝宴では)、かの院よりも(朱雀院からも)、\*主人の院方よりも(会場の六条院からも)、いかめしくめづらしきみやびを尽くしたまふ(盛大で趣向を凝らした料理や記念品が列席者に振舞われます)。\*「みかがほど」は<三日間>。格式張った祝宴は三日間に渡って行なわれるのだろうか。大変な散財だし疲れる。だからこそ本格的とも言えそうだが、何か大陸的な莫迦莫迦しさを感じる。\*「あるじのあんなかた」は<婿である六条院の負担分>ではなく<会場である六条院の持分>なのだろう。通い婚の祝宴の場合は「主人」が嫁の実家の戸主=父親か実兄になる筈だ。

\*対の上も(東の対にお住まいの紫の上も)、ことに触れてただにも思されぬ世のありさまなり(何かにつけて心穏やかならぬ夫婦関係の様相です)。\*「対の上」は<紫の上。『集成』は「東の対に住むところから出た呼称」。『完訳』は「必ずしも正妻を表す呼称ではない」と注す。>と注にある。私の印象では、二条院時代には紫君を「対の君」と呼称した事はあったかも知れないが、少なくとも六条院に二条院から移り住んでは、紫の上を「対の上」と明示して呼称したのは梅枝巻一章三段が初めてだったと思う。ちょうど一年前の二月十日の薫物合わせの段だ。そして、その薫物合わせは明石姫の入内準備の一環だった。明石姫の御座は寝殿母屋の西側半分だったと思う。つまり、今回の三の宮の御座となる場所だ。そして、寝殿東側は殿の御座であるらしい。ただ、それは一年前からこと、のように私には思える。あらためて少し整理してみる。二条院時代は、殿が東の対で紫君は西の対に住んで居た。殿は基本的に独り寝で、気が向けば西の対に渡ったし、外泊も多かった。しかし、31歳の時に二条東院を造営した頃から、外泊も減り、二条本院の寝殿西側で明石姫の養育を紫君に任せるようになってからは、文化事業を主軸に今上帝の補佐に務めると共に、王家の威信の保持を含めた自身の保身も図って責任ある立場で政局を乗り切るのに忙しい日々を送った。そして、人生の集大成としての六条院造営を企画し、今から五年前の35歳の八月にその実現を見た。六条院に移ってからは、外出はともかく外泊はなくなり、院内の夏の町や冬の町にでさえ殆んど泊まらない。夏の町の対の姫に入れ揚げた時でも決して泊まらなかった。ということは、殿は寝殿東側で紫の上と同居していた可能性が高い。必ずしも共寝ではなかったろうし、具体的な様子は書かれていないので分からないが、独立性よりは共同性の高い生活だったような印象だ。というのは、それが明石姫の養育を

主軸にした夫婦生活に思えるからだ。ところが明石姫の入内が差し迫ると、殿は俄かに独自性を意識し出して、薫物合わせに付いては「大臣は寝殿に離れおはしまして、承和の御いましめの二つの方を、いかでか御耳には伝へたまひけむ、心にしめて合はせたまふ」(梅枝巻一章一段)と紫の上との別居を言い出して、自分は寝殿東部屋に、紫を東の対に、と住み分けた。「対の上」は正にそうした源氏殿の意識の産物だ。是は練り香の調合に凝る余りという遊び心のような語り口だったが、何かに集中すると独りで籠もりたがるという源氏殿の本性が、子育ての終了と共に再び目を覚ました、という波乱含みの話の運びの不気味さを梅枝巻一章は当初から放っていた。

\*げに(殿の仰せの通り)、かかるにつけて(この結婚で)、こよなく人に劣り消たるることもあるまじけれど(私がまったく三の宮に劣って忘れ去られることともないだろうが)、\*また並ぶ人なくならひたまひて(今まで他に並ぶものがない正妻の地位にいらして)、はなやかに生ひ先遠く(華やかで若く)、あなづりにくきけはひにて移ろひたまへるに(とても見下せない威光を持って輿入れなされた姫宮に)、なまはしたなく思さるれど(紫の上は引け目を感じなされたが)、つれなくのみもてなして(気にならない素振り)、御渡りのほども(御輿入れの時も)、\*もろ心にはかなきこともし出でたまひて(殿と同様に細かな気配りのお世話で迎え入れなされて)、いとらうたげなる御ありさまを(実に感心な上の御態度を)、いとどありがたしと思ひきこえたまふ(殿はますます得難い逸材と御思い為さいます)。 \*「げに」は以前に源氏が言ったことを受ける。と注にある。四章二段に「いみじきことありとも、御ため、あるより変はることはさらにあるまじきを、心なおきたまひそよ」と殿の言葉があった。 \*「また並ぶ人なくならひたまひて」は注に<紫の上の今までをいう。尊敬の補助動詞「たまふ」が混入するところに、心中文と地の文が融合した表現といえる。「て」接続助詞、逆接。>とある。確かに主語の分かり難い文だ。 \*「もろころ」は「諸心」で<心を合わせること。同じ心。>と大辞林にある。殿と同様に姫宮一行を世話して迎え入れた、ということなのだろう。

姫宮は、\*げに(話に聞いた通り)、まだ\*いと小さく(まだ体もとても小さく)、片なりにおはするうちにも(未成熟でいらっしやるにしても)、いといはけなきけしきして(本当に幼く見えて)、ひたみちに若びたまへり(ただただ子供なのでいらっしやいました)。 \*「げに」は<かねて話に聞いたとおり>だが、この「げに」が直接受け止める記述は無かった。が、四章一段に「紫の上も、かかる御定めなむと、かねてもほの聞きたまひけれど」と朱雀院の意向を承知していたという記事があり、上は当然に、側近からの経緯報告の中に姫宮の年齢や人柄についての説明も受けていたのだろう。 \*「いと小さく」は<体が小さい>。三の宮は14歳。幼年ではないので小柄だったのだろう。

\*かの紫のゆかり尋ね取りたまへりし折思し出づるに(源氏殿はもう一方の藤壺入道宮の血縁である紫の上を北山に見つけ出して引き取りなされたことを、この三の宮と比べて思い出しなされるに)、 \*「かの紫のゆかり」は注に<紫の上のことをいうのだが、「紫のゆかり」という表現に注意しなければならない。今度の女三の宮も「紫のゆかり」として関心を抱いたのである。すなわち「藤壺」ということが、依然と源氏の心底に行動原理としてあるのである。>とある。弥に講義然とした注釈だが、なるほど説得力はある。従って<もう一方の>と補語する。

「かれは\*されていふかひありしを(上は当初から率直さの中に血筋の良さが忍ばれる風情があって感じ入るところが在ったが)、これは(この姫宮は)、いといはけなくのみ\*見えたまへば(まるで幼さが目に付くばかりでいらっしやるので)。よかめり(まあ良いだろう)。憎げにおしたちたることなどはあるまじかめり(これほど幼ければ上と張り合って、生意気な憎まれ口を仰るこ

とも無いだろうから)」 \*「さる」は<洒落ている>。原義は<長く風雨日光に曝されて形が崩れる→境遇の悪さに却って地金の良さが表れて独特な風情がある>のように古語辞典に説明されている。掃溜めに鶴、の美学が「洒落」だろうか。意外な高評価、視点転換、再評価、再発見、停滞打破、などに通じる手法なのだろう。紫君が捕らえたスズメの子を遊び仲間が逃がしたことに不満を言う幼さの中に、自分を曝す素直さ、主張の強さ、などの「いふかひ(手応え)」を若い光君は感じた、ということをおぼせる語り口ではありそうだ。具体的には藤壺の面影がある、ということだろうが、下に「憎げにおしたちたることなどはあるまじかめり」が「さる」の反対概念のように述べられているので、訳文にある<才気がある>も加味して言い換える。 \*「見えたまへば」は後ろに<いふかひなし>や<あぢきなし>が省かれている。悪口だから口を濁したか。

と思すものから(とお思いになるものの)、「いとあまりものの榮なき御さまかな(まああまりパツとしない御姿だな)」と見たてまつりたまふ(と姫宮を拝し申しなさいます)。

### [第三段 源氏、結婚を後悔]

\*三日がほどは(新婚初夜の三日間は)、\*夜離れなく渡りたまふを(殿が新婦に夜離れなく毎晩続けて東の対の紫の上の許から寝殿母屋にお通いなさるのを)、年ごろさもならひたまはぬ心地に(数年来外泊なさらず独り寝に慣れていらっしやらない上の心中には)、忍ぶれど(表には出さないものの)、なほものあはれなり(やはり物悲しいのです)。 \*「三日がほど」は二段冒頭と同じ言葉で、同じ日のことなのだろう。が、二段の「三日がほど」は日中の祝客接待で、此処の「三日がほど」は夜の泊まりのこと、かと思う。さっぱり分からないが勝手に想像すると、日中の接待は「西の放出に御帳立てて」と一段にあったので、寝殿の南表、西側だけか東側も含めてかは更に不明、だったのだろう。で、夜の泊まりだが、是は寝殿の母屋、かと思う。今更に、当時の様式に不案内な自分と、作者の説明の無さに不満が募る。 \*「夜離れなく渡りたまふ」は注に<結婚三日間。源氏は東の対の屋から女三の宮を迎えた寝殿へ通う。>とある。ということは、源氏殿は基本的に東の対で紫の上と一緒に暮らしていた、ということだろうか。それは、六条院に引っ越した当初以来のことなのだろうか。そうかも知れない。が、野分巻一章四段の台風一過の早朝に中納言(四年前の八月の事で当事は左中将)が源氏殿を見舞った際に、「南の御殿に参りたまへれば、まだ御格子も参らず」とあり、その「南の御殿」で殿が紫の上と共寝していたかの記事があったが、その「御殿(おとど)」は寝殿ではなく東の対だったのだろうか。混乱する。ただ、何れにしても今現在は、殿は基本的には東の対で紫の上と共に暮らしていて、だからこそ「対の上」と呼称するのだろう、と今のところは考えておこう。非常に面倒だ。こういう基本的な場面設定の前提条件を分かり易く明示していないのは、いくら読者が宮廷人だとしても、六条院は特殊な建物設計だろうし、物語の人物設定も特殊なのだから、作者の不備ないし大きな脱稿が思われてならない。

\*御衣どもなど(殿のお召し物などを)、いよいよ薫きしめさせたまふものから(女房に香炉でいっそう念入りに焚き染めさせなさりながらも)、うち眺めてものしたまふけしき(上御自身はうつろにしていっしやる様子は)、いみじくうたげにをかし(非常に労しく趣き深い)。 \*この文は注に<「真木柱」巻の鬚黒大将の北の方が夫が雪もよいの夜に玉鬘のもとに通って行こうとするのを送り出す場面と類似する。>とある。他の女の所に出掛ける夫の世話する姿、ということだろうか。式部卿宮家に負わされた宿命、みたいなことだろうか。上が心理破綻を起こす前触れ、という指摘だろうか。宮家血筋の自負ゆえに、表向きは平静を装い、陰に籠もって無念さを募らせる、という心理作用は確かに二人に共通しているように見える。面白い指摘だ。が、作者が読者にそういう興味を持たせるような書き方をしているのは明白で、私も上自身や源氏殿との関係がこの先どうなるのだろうという興味はある。ただ、藤大将と源氏殿とでは新妻に対する思い入れに相当

な違いがあるようで、同様の展開とも思えない。が、その展開の複線に大将の北の方の物怪憑依の話が引かれていたとすると、作者の残酷なまでに冷徹な視点に驚かされるし、経験も世間観察も積んだ言語学者が今更には甘っちょろい御伽噺など書けやしないと云わんばかりの当時の時代の実相実態を見るような感慨も覚える。

「\*などで(決して)、よろづのことありとも(色々な事情があるにせよ)、また人をば並べて見るべきぞ(もう一人の別の人を同等の妻として結婚してはいけなかった)。 \*「などで一みるべきぞ」反語表現。と注にある。「見る」は<結婚する>。「べし」は妥当性の助動詞。「などで一みるべきぞ」は<どうして結婚して良いのか=決して結婚するべきではなかった>。

あだあだしく(色事好きで)、\*心弱くなりおきにけるわがおこたりに(きっぱり断れなくなっていた私のだらしなさから)、かかることも出で来るぞかし(こういうことになったのだろう)。 \*「心弱くなりおく」は<何となく弱気になる>のではない。「心弱し」は<気弱だ→気丈でない=決断できない→断れない>。「置く」は<放置する>。「成り置く」は<結果として形付く>。「心弱くなりおく」は<断れないまま事が決まる←断り切れない=きっぱり断れない>。

若けれど(若いとは言え)、中納言をば\*え思しかけずなりぬめりしを(朱雀院は中納言を婿にはお考えにならなかったようなので) \*「え思しかけずなりぬ」の主語は朱雀院。「めり」推量の助動詞、源氏の主観的推量。「し」過去の助動詞、連体形。「を」接続助詞、逆接。その下に、自分が婿になってしまった、という意が含まれている。『集成』は「夕霧を(朱雀院は)婿にとはお考えにならなかったようなのにと」。『完訳』は「中納言を婿にとはお考えになれずじまいだったらしいものを」と訳す。と注にある。従って補語する。ただし、「を」は順接の結論省略で無念さを滲ませる語法だ。

と(と六条院は)、われながらつらく思し続けるに(我ながら情けなく思い続けなさっては)、\*涙ぐまれて(つい涙がちに)、 \*「涙ぐまれて」は現代語の丁寧語と同じ見掛けだが、助動詞の「る」は尊敬表現ではなく、無意識の生理現象として自生的に起こった事態を示す受身表現で、是が延いては婉曲表現から貴人への遠慮した言い回しとしての尊敬表現に継がるとしても、此处では<思わず>という描写だ。

「今宵ばかりは(今夜ばかりはあちらで泊まるのを)、ことわりと許したまひてむな(分かって下さいね)。これより後の\*とだえあらむこそ(今後の外泊があったなら)、身ながらも\*心づきなかるべけれ(私自身も不本意なことでしょう)。また(しかし)、さりとして(そうは言っても)、かの院に聞こし召さむことよ(朱雀院に於かれても姫宮の此方での御様子は御聞き知りなさるわけなので)」 \*「途絶え」は分かり難い。言葉の意味は<行き来が無くなること>だろうし、現代語では<連絡も付かない>くらいの語感だ。が、此处での語用は<共寝をしないこと←情交しないこと>ではあるのだろう。で、分からないのは基本的な殿の御座が何処なのか、ということだ。殿が日中は寝殿の東母屋に居て、夜に東の対に渡るのだとしたら「途絶え」は<渡りがないこと>との掛詞にも見えるし、殿の昼御座が東の対なら「途絶え」は<同衾しないで、外泊すること>を意味する。後者と見る。 \*「心付き無し」は<[形ク]意に満たない。気に食わない。>と大辞泉にある。自分が自分の意志で外泊していて、それを自分自身が納得できない、などという言い方は、他人にとっては本当に如何でも良い事で、知った事ではないし、本人が厭なら止めれば良いだけのことだ。それを他人に向かって言う、というのは、不本意だがそうせざるを得ない私の苦しい事情を察してくれ、という意味ぐらいしか成立しない。甘えた、ふざけた言い草だ。が、身内と頼ってこそその甘えなのだろうし、相手に通じるか如何かはその場の風任せで、つまりはダメ元のボヤキだ。

と(と仰って)、思ひ乱れたまへる御心のうち(思い悩んでいらっしゃる御心の内は)、苦しげなり(苦しそうです)。

\*すこしほほ笑みて(紫の上は少し微笑んで)、 \*主語は紫の上。と注にある。いくら客観表現を排除する女房語りでも、複数人物の登場場面描写での主語省略は本当に厄介だ。

「みづからの御心ながらだに(ご自分のお考えでさえ)、え定めたまふまじかなるを(お決めなされないようですのに)、ましてことわりも何も(まして私には分かるも分からないも)、いづこに\*とまるべきにか(如何考えたら良いものやら)」 \*「とまる」は「止まる」で<落ち着く、決着する>で、「とまるべし」は<妥当な結論を得る=よく考える>。という言い方らしいが、「とまる」は「泊まる」との掛詞で「いづこにとまるべし」は<何処に泊まれば良いのか>と殿を揶揄した言い方でもあるのだろう。

と、いふかひなげにとりなしたまへば(甘えも効かないように対応なされたので)、\*恥づかしうさへおぼえたまひて(殿は立場も無くお感じなさって)、つらづゑをつきたまひて(頬杖をお突きになって)、寄り臥したまへれば(ごろ寝なさると)、\*硯を引き寄せたまひて(上は硯を引き寄せなさって)、 \*「恥づかしうさへおぼえたまひて」は<主語は源氏。>と注にある。 \*「硯を引き寄せたまひて」は<主語は紫の上。>と注にある。主語省略は本当に厄介だが、経過説明の接続助詞「ば」で視点転換して事の運びを進める女房語りの臨場感も捨て難い。

「目に近く移れば変はる世の中を、行く末遠く頼みけるかな」(和歌 34-05)

「目の当たりにした変わり身を、頼りにしてた浅はかさ」(意識 34-05)

\*下に「古言など書き交ぜたまふを」とこの歌を説明してあるが、その「ふること」とされる古歌は参照出典に「秋萩の下葉につけて目に近くよそなる人の心をぞ見る」(拾遺集雑秋-1116 女)が掲示されている。「ハギ」は字を見ても秋の花の代表格で、古くから歌に読まれているらしい。で、幾つかの和歌のサイトを参照したところ、「秋萩の下葉」や「萩の下葉」は、萩の枝が下の方の葉から赤く枯れ始めることを言うようで、どうやら<変わり身>を意味するらしい。で、「秋萩の下葉につけて」は<変わってゆく萩の姿を見るにつけて>を意味し、「目に近くよそなる人の心をぞ見る」は<余所余所しくなる恋人の心変わりを目の当たりにするようだ>と疎遠な相手に当て付ける。確かに当歌は、古歌の「目に近く(目の当たりに)」の語を転用しただけでなく、歌意自体を下敷きになっているようだ。

古言など書き交ぜたまふを(と古歌などを取り入れた歌をお書きになるのを)、取りて見たまひて(殿は手に取ってお読みになって)、はかなき言なれど(ふと思いついたような歌ながら)、げにと(言われてみれば)、ことわりにて(その通りなので)、

「命こそ絶ゆとも絶えめ、定めなき世の常ならぬ仲の契りを」(和歌 34-06)

「命枯れても変わらぬと、誓った愛に嘘は無い」(意識 34-06)

\*注に<源氏の返歌。夫婦仲の意の「世の中」を受けて、「定めなき世」という世間一般の世の中の意で切り返し、夫婦仲は変わらないという。>とある。たとえ命が尽きたとて、通り一遍の夫婦とは違う変わらぬ愛を僕らは誓っ

たじゃないか、という歌筋なのだろう。能くもまあ、こーゆークサイ台詞が言えたもんだ。やっぱり二枚目は出来が違うね。「命」という言葉の重さと、それを安易に持ち出す源氏殿の軽さ。

とみにもえ渡りたまはぬを(と返歌して、ぐずぐずなさっているのを)、

「いと\*かたはらいたきわざかな(遅くなつてはまた不都合でしょうに)」 \*「かたはらいたし」は<第三者の評価として不都合な事態に当事者が不利な立場に置かれる=みっともなく見える>。三の宮の部屋に渡るのが遅れると、姫自身に対して礼を失するし、また周りの女房たちに対しても不利な憶測を持たれる。是は殿にとって不都合だ。ところで、殿と姫の初夜には上は第三者だ。上にとっては、「命こそ絶ゆとも」と口では言いながら新妻の部屋に向かう六条院という男は、全く言う事と遣る事が違う信用できないヤツで、つくづく「片腹痛し(笑止だ)」だ。当然、そういう皮肉を籠めた言い方であり、作者の冗長な笑わせ所に違いない。

と(と上が)、そそのかしきこえたまへば(促し申しなさると)、\*なよよかにをかしきほどに(優雅に美しく)、えならず匂ひて渡りたまふを(甘い匂いを振りまいてお渡りになる殿を)、見出だしたまふも(送り出しなさるのも)、いとただにはあらずかし(上は決して平静ではなかったでしょう)。 \*この文は、それでもやっぱり行くんだ、と読者を更に大笑いさせる描写でありつつ、上の陰影はくっきり浮かびだしている。古典的で、今でも用いられる浮気男の場面だ。

[第四段 紫の上、眠れぬ夜を過ごす]

年ごろ(何年も)、さもやあらむと思ひしことどもも(もしかすると他の女に妻の座を襲われることもあるかも知れないと見て来ていらした殿の女遊びも)、今はとのみもて離れたまひつつ(もう終りとすっかり為さらなくなったことで)、さらばかくにこそはとうちとけゆく末に(もう是で地位が脅かされることは無いと安心してこの晩年になって)、ありありて(いろんなことがあった挙句に)、かく世の聞き耳もなのめならぬことの出で来ぬるよ(このような外聞も憚られることが出て来たわけです)。思ひ定むべき世のありさまにもあらざりければ(思ったように事が進む人生でもなかったのだから)、今より後もうしろめたくぞ思しなりぬる(今後もどうなるか分からないと紫の上はお考え為さるようになったのです)。

さこそつれなく紛らはしたまへど(上は表面こそ何でも無いように誤魔化していらっしゃるが)、さぶらふ人びとも(側仕えする女房たちも)、

「思はずなる世なりや(思い掛けない事になりましたね)。あまたものしたまふやうなれど(殿には御方様が大勢いらっしゃるようでも)、いづ方も(どの御方も)、皆こなたの\*御けはひには\*かたさり憚るさまにて\*過ぐしたまへばこそ(皆こちらの上の高貴な御血筋には一步下がって謙譲の礼を以て納得していらっしゃったればこそ)、ことなくなだらかにもあれ(争いもなく穏やかだったのですから)、おしたちてかばかりなるありさまに(この度の姫宮方の他を圧倒する一際豪儀なこうした婚礼祝いに)、消たれてもえ過ぐしたまふまじ(影を薄くされてしまっても上はそれで善しとは納得なさらないだろう)」 \*「けはひ」は<気品・風格>と古語辞典にあるが、此処ではそういう曖昧なものではなく、「御」と敬われる上の王家血筋の高貴さ、なのだろう。 \*「かたさる」は「片去る」と表記されく片隅に下がって遠慮する>のように古語辞典に説明される。 \*「過ぐす」は<遣り過ぐす←承知する・納得する>。

ところで、この女房の弁の場を借りた此処の文は、作者自身による上の事情の簡潔なまとめであり、大方の読者の印象を代弁してもいそうだ。

「また(それにまた)、\*さりとして(今回は是で無事に済んだたとしても)、はかなきことにつけても(ちょっとした事でも)、安からぬことのあらむ折々(軋轢があるに違いない先々に)、かならずわづらはしきことども出で来なむかし(必ず一悶着起こるでしょうよ)」 \*「さりとして」は<それにそう言えばさあ>くらいの言い回しかも知れない。少なくとも文意上は、前言者に同調しているので、反論の<そうは言っても>という意味でないのは確かだ。だから、「とて」は順接で「さり」を受けているとも言えそうだが、もし「とて」を逆接に取るなら、「さり」は<今回は無事に済んだ>という意味になる、かと思う。

など、おのがじしうち語らひ嘆かしげなるを(各々が話し合って嘆かわしく思っていそうなのを)、つゆも見知らぬやうに(上は少しも気付かぬ振りで)、いと\*けはひをかしく物語などしたまひつつ(とても気品ある美しさでお話しなさりながら)、夜更くるまでおはす(夜更けまで起きていらっしやいます)。 \*「けはひをかしく」は注に<『集成』は「いかにも優雅な風情で」。『完訳』は「まことにご機嫌よく」と訳す。>とある。どちらにしても哀れさが際立つ描写だが、三の宮との対比で別格を示すならく気品ある美しさで>が良さそうだ。ただ、そうすると俄然、紫の上が葵の上に重なる。

#### [第五段 六条院の女たち、紫の上に同情]

かう人のただならず言ひ思ひたるも(上はこのように女房などが今の事態を徒事では無いと思ひ口にするのも)、聞きにくしと思して(耳に辛くお思いになって)、

「かく(殿は今までも)、これかれあまたものしたまふめれど(彼是と多くの女たちと関係をお持ちなさっていらしたようだけれど)、御心にかなひて(どなたも殿が正妻とご納得なさるほどの)、今めかしくすぐれたる際にもあらずと(権勢ある高貴な身分の家柄ではないと)、目馴れてさうごうしく思したりつるに(平凡で物足りない者たちばかりに御思いでいらしたところに)、この宮のかく渡りたまへるこそ(この宮がこうして御輿入れなさった事こそ)、めやすけれ(体裁が整って、御目出度い事です)。

なほ(私は今でも)、童心の失せぬにやあらむ(子供心が抜けないからなのではないでしょうか)、われも睦びきこえてあらまほしきを(宮と仲良くし申して遊んでみたいのに)、あいなく隔てあるさまに人びとやとりなさむとすらむ(逆に分け隔てするように周りの者たちは取り計らおうとするようですね)。\*ひとしきほど(私が宮と同等だとか)、劣りざまなど思ふ人にこそ(下に成るなどと考えると)、ただならず耳たつことも(聞き過ぎせないことも)、おのづから出で来るわざなれ(何かと出て来るものなのですから)。かたじけなく(宮は畏れ多い御身分で)、心苦しき御ことなめれば(母御を亡くされた劳しい御事情からお越しになったことらしいので)、いかで心おかれたてまつらじとなむ思ふ(どうか心を開いて頂きたいと思っています)」 \*「ひとしきほど、劣りざまなど思ふ人にこそ」は注に<同程度の身分や劣った身分に対しては、つい張り合っ黙ってられないこともあるものだ、とする当時の貴族社会の人情をいう。>とある。「人にこそ」の「人」は一般名称で<場合>を示し、「こそ」は仮定語法なので「人にこそ」は<~という場合には>という言い方、かと思う。「わざなれ」は下に<ば、さに非ず>などが省かれている。しかし、この身分意識は「人情」というよりは、厳然とした社会構造認識で、その認識に基づいて人々



は行動する。当時の人は、この認識無しには社会人として生きてゆけない。だから、是を否定する上の言い方は現代人なら尤もに聞こえる言い分かも知れないが、当時の人にとっては空言・戯言に過ぎない。つまり、強がりに過ぎないことがはっきりと顯れた可哀相な場面だ。現に直下に「かたじけなく」と自ら翻語している。

などのたまへば(などと仰ると)、\*中務、中将の君などやうの人びと(中務や中将といった須磨退去時の上の苦労を知る女房たちが)、目をくはせつつ(目配せしながら)、\*「中務、中将の君」は源氏殿が若い光君の時から二条院東の対に仕えていた御手付き女房で、光君 26 歳の須磨退去の際の須磨巻一章五段に、「わが御方の中務、中将などやうの人びと、つれなき御もてなしながら、見たてまつるほどこそ慰めつれ、「何ごとにつけてか」と思へども」と不満ながらも、当事 18 歳の若妻だった西の対の紫君に預けられる、という記事があった。もう 14 年前のことだ。

「あまりなる\*御思ひやりかな(度の過ぎた御謙遜ぶりだわね)」 \*「御思ひやり」は上の<殿への遠慮>。この女房たちの「御」には殿への実感が込められているだろう。宮への実感は無い。

など言ふべし(などと言うのは当然です)。昔は(この女房たちは昔は)、ただならぬさまに使ひならしたまひし人どもなれど(殿が召人になさっていらした人たちだが)、年ごろはこの御方にさぶらひて(その後は長年とこの御方に仕えて)、皆心寄せきこえたるなめり(皆ご同情申し上げているのですから)。

\*異御方々よりも(他の御方がたからも)、\*「ことおんかたがた」は注に<花散里や明石御方からのお見舞い。間接話法。『集成』は「こういう場合は、見舞うのが当時の妻妾間の礼儀であった」。『蜻蛉日記』の作者から時姫へのお見舞いが想起される。『完訳』の「このあたりの同情には、紫の上の不幸を喜ぶ気持さえあろう」と注すのは、花散里や明石御方の人柄からして、いかがなものか。>とある。「花散里や明石御方の人柄」は左に置いて、女房他の家人たち即ち六条院全体が興味深く上の動向を見ているということは間違いなく、それが上に相応な負担を掛けてはいるのだろう。

「いかに思すらむ(上は如何お思いなのだろう)。もとより思ひ離れたる人びとは(もともと妻の座など諦めている者にとっては)、なかなか心安きを(却って気に成りませんが)」

など、\*おもむけつつ(様子を窺いながら)、とぶらひきこえたまふもあるを(御見舞い申しなさる使者があるのも)、\*「おもむけつつ」は文字通り「面向けつつ」で<興味深く様子を窺いながら>。

「かく推し量る人こそ(そのように私の心中を詮索する人が居ることが)、なかなか苦しけれ(却って迷惑なのです)。世の中もいと常なきものを(世の中では他の事もとても目まぐるしく変わるものなのに)、などてかさのみは思ひ悩まむ(どうしてこの事ばかりを思い悩むものですか)」

など思す(などと上はお思いになります)。

あまり久しき宵居も(あまり遅くまで起きているのも)、例ならず人やとがめむと(いつにないことと女房たちが自分の傷心を勘ぐるのを)、\*心の鬼に思して(上は恐れ嫌いなさって)、入りたまひぬれば(寝床にお入りになると)、\*御衾参りぬれど(女房が掛け布団をお掛け申せば)、げにかたはらさびしき夜な夜な経にけるも(確かに独り寝の寂しい連夜を過ごすにつけても)、なほ

(さすがに)、ただならぬ心地すれど(物悲しい気がするが)、かの須磨の御別れの折などを思し出づれば(あの須磨退去の際のお別れの時のことなどを思い出しなさんと)、\*「心の鬼」は<良心の呵責>と古語辞典にあり、他の文例からも妥当な言い換えと敬服するが、此处ではそのままでは使えなさそう。ただ、気が引ける、という気持ちは同じだろうから、その恐縮が<良心>とは別の<急所=弱点>を何かに突かれて困っている事情に抛るものなのだろう、とは推測される。それは此处では恐らく、強がりやがばれてしまうのを恐れる気持ちであり、裏返せば、平静の振りで隠し通したい傷付いた本心があることの明示を意味するので、その露見を非常に<恐れ嫌う>のだろう。\*「衾」は「ふすま」との読みで<掛け布団>。恐らくは、下の「須磨」を導く枕詞を意図した語呂合わせの語用だろう。だから、「参りぬれど」の逆接の接続助詞「ど」は、意味としては「かの須磨の御別れの折」に繋がるもので、「げに〜心地すれど」は「参りぬ」の補説挿入句と見做す。もう少し言えば、此处の文は「入りたまひぬるに御衾参りぬれば」だと分かり易い気がするが、「に」の接助では場面描写が説明口調になる嫌いがあるのかも知れない。

「今はと(さようならと)、かけ離れたまひても(遠く須磨へお下りになっても)、ただ同じ世のうちに聞きたてまつらましかばと(ただ御無事が知れ申すものならと)、わが身までのことはうち置き(自分の寂しさはさて置いて)、\*あたらしく悲しかりしありさまぞかし(殿の御不幸を惜しみ悲しんだものでした)。さて(あのまま)、その紛れに(あの混乱に紛れて)、われも人も命堪へずなりなましかば(私も殿も死んでいたなら)、いふかひあらまし世かは(今の栄誉を見ることも無かった二人の仲だったのだろう)」\*「あたらし」は「惜し」で<惜しい、勿体無い>。

と思し直す(と殿の真心を信じようと思ひ直しなさいます)。

\*風うち吹きたる夜のけはひ冷やかにて、ふとも寝入られたまはぬを(心穏やかには寝入りなされないのを)、近くさぶらふ人びと(近くに控える女房たちが)、あやしとや聞かむと(起きていることを怪しむのではないかと)、うちも身じろきたまはぬも(物音を立てぬように上が少しも身じろがずにいらっしゃるのも)、なほいと苦しげなり(却ってとても辛そうです)。\*夜深き鶏の声の聞こえたるも(その内に、まだ暗いながらも一番鶏が夜明けを知らせるのも)、ものあはれなり(物悲しい)。\*「風うち吹きたる夜のけはひ冷やかにて」は注に<紫の上の心象風景、また心中の象徴表現。>とある。幸いに原文のままで読める。\*「夜深き鶏の声」は<夜明けにはまだ間のある暗いうち、一番鶏が鳴きだす。紫の上が眠らずに朝を迎えたことを語る。>と注にある。従って補語する。

#### [第六段 源氏、夢に紫の上を見る]

わざとつらしとにはあらねど(目に見えて辛そうではなかったが)、かやうに思ひ乱れたまふけにや(その実このように思い悩みなさる気配があったのか)、かの御夢に見えたまひければ(上が殿の夢枕に現れなされたので)、うちおどろきたまひて(殿はハッとなさって)、いかにと心騒がしたまふに(上に何かあったのかと胸騒ぎなさって)、鶏の音待ち出でたまへれば(一番鶏が啼くのを待って)、夜深きも知らず顔に(まだ暗いのも分からない振りをして)、急ぎ出でたまふ(急いで東の対にお帰りなさいます)。

いと\*いはけなき御ありさまなれば(新妻の姫宮はごく幼くまだ床所作に不慣れの御様子なので)、乳母たち近くさぶらひけり(不都合を取り成す為に乳母や女房が閨の近くに控えていまし

た)。 \*「いはけなし」は<子供っぽい、あどけない>と古語辞典にあるが、「なれば」は理由説明の接続詞なので<あどけないから>「乳母たち近くさぶらひけり」という言い方に成る。しかし、宮は14ないし15歳だ。幼少だから見守る、という程の年少ではない。考えられるのは、性経験が無いことだ。深窓の令嬢だけに処女は間違いない。そして、母親が早世して父親の近くで育てられたが故に、女房たちも仕込み加減を遠慮して、未摘なみに晩生だった可能性が高い。となると、行き成り本番に臨むわけで、宮が何を如何思うのか、どう騒ぎ出すか、不測の事態が懸念される。そうした混乱に備えて、事を収めるために乳母たちは控えていた、に違いない。帝胤の光源氏が藤壺ゆかり腹の姪を抱く、ということだから、この初夜の様子は私も興味深い。が、今のところ何も語られていない。ただ、宮についての殿の印象としては、本章二段に「いといはけなくのみ見えたまへば」とあり、更には「いとあまりものの榮なき御さまかな」と宮を抱いた後の感想らしき殿の評価があったので、宮は大人しくは抱かれたものの趣きある性反応など皆無の人形状態だった、ようだ。が、是は非常に重要な認識であるにも関わらず、この点に付いての場面描写や説明記事が無いのは相当に罪深い。大体が、源氏殿は射精出来たのだろうか。射精したとして、膣内か外か。女にとって男の射精は、性感上の快感と共に、愛されていることに歓ぶ気持ちを持つてなければ、尊いものに思える筈もなく、単に生理排泄に過ぎない。そして男は生理として、排泄欲求としての射精願望を一定の環境下では常に持つ。だからこそ、場当たりで人間関係を過たないように、地位ある者の性欲制御処理として召人が必要とされる。しかし召人は生身の女なので、単なる性処理係ではなく、主人の人格形成に相当な影響力がある。であれば、女の素直な性反応や演技力無しに、経験豊富でその技巧も駆使したであろう晩年の男を勃起させることは出来るのだろうか。という切実な疑問があるが、その触りほどの場面描写もない。ならば、義務感から何とか工夫して殿が射精まで漕ぎ着けたとして、宮は濡れることもなく、その青臭い精液をどういう思いで処理したと言うのだろうか。どういう形にせよ、肌を重ねて性交したのなら、その経験には、どんな晩生の姫宮でも相当に深い印象を受けた筈であり、それで変わらないほどの権威の重圧に縛られて、一方では被害者意識で人生を諦観し、一方ではそれを堅い鎧として身に纏い、結局は引き籠りを自らの安住世界と思いついでいるのなら、それこそ未摘の二の舞だ。いや、だから、それならそれでもいいから、そういう説明が欲しい。抱かれる前ならともかくも、抱かれてからも「ひたみちに若びたまへり」(二段)というだけでは、読者は、少なくとも私は、納得しない。

\*妻戸押し開けて出でたまふを(殿が寝殿の東南の妻戸を押し開けてお帰りをなさるのを)、\*見ためまつり送る(宮はお休みだったので、その乳母たちが送り出し申上げます)。 \*「妻戸」は建物の四隅にある筈で、下に「雪の光見えて」とあるので南庭向きの東側と見る。 \*「見奉り送る」に敬語がないので宮は見送らない。殿が寝かせたままにした、と考える。

\*明けぐれの空に(明け方の月も無い暗い空に)、雪の光見えておぼつかなし(庭の雪が灰見える)。名残までとまれる御匂ひ(残り香を留める殿の御着物の匂いに)、 \*「明けぐれ」は<夜明け前に月も落ちていっそう暗く成る時分>らしい。15夜前の13夜だと月の入りは4:30くらいのようなので、5:30くらいは暗そうだ。

「\*闇はあやなし(暗くても隠れないか)」 \*注に<「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠る」(古今集春上、四一、凡河内躬恒)>とある。歌筋は<春の夜の闇は意味が分からない、梅の花の色こそ見えなくなるが香りは隠れるものか>で、逞しく女を探して夜這う心意気だろうか。ただ此処では、隠れないのは殿自身で、宮の手前も、上の手前も、目立たずに帰りたい本音を洒落で誤魔化す照れ隠し、なのだろう。

と\*独りごたる(と殿は慌てて帰る気恥ずかしさに思わず古歌を独り言しなさる)。\*「独りごたる」の主語は文意からして六条院。「ひとりごつ」は<独り言を言う>で、内心文と見れば敬語省略もある。助動詞「る」は不意の動作や受身表現で<思わず>の意味か、軽い尊敬表現なのかも知れない。

雪は所々消え残りたるが(雪は所々消え残ったものが)、いと白き庭の(とても白い庭砂と)、ふと\*けぢめ見えわかれぬほどなるに(直ぐには区別が付き難いほどなので)、\*「けぢめ見えわかれぬ」は<白い砂と雪との見分けがつかないの意。>と注にある。「白き庭」が<白い庭砂>を意味するか。造園知識の無い私には難文だが、そういうことなら、「雪」に何かを例えているか、象徴させているか、「けぢめ見えわかれぬ」ことは謎掛けめいた言い回しに見える。

「\*なほ残れる雪(やはり気になる別の白いもの)」\*出典参照に<「子城陰處猶残雪 衙鼓声前未有塵」(白氏文集卷十六九一一)>とある。さっぱり分からないのでWeb検索すると、「漢詩を楽しもう—tiandaoの自由訳漢詩」Weblogサイトに解説があった。私自身には漢詩読解力が無いので無批判に全面依拠する。と、この詩は「庾楼曉望(ゆるうぎょうぼう)」と題され、静かな旅情に望郷を詠んだ八行詩らしい。引用部分の訳は「子城(しじょう)の陰處(いんしょ)猶(な)お雪を残し、衙鼓(がこ)の声前(せいぜん)未だ塵(ちり)有らず」とあり、解説は<詩中の「子城」は出城のことで、白居易は子城の陰の残雪に目をとめます。「衙鼓」は朝の開門を告げる太鼓で、開門の太鼓が鳴る前ですので人馬の往来もなく、路上に塵も立っていません。静かな朝です。>とある。だから一先ずは、壁際に解け残った雪の庭を通過して帰る旅人が今から開門を求める、という漢詩の風情に源氏殿は自分の姿を被せて洒落てみた、と理解しておく。しかし文脈からすると、この「なほ残れる雪」という言葉は「けぢめ見えわかれぬほどなるに」を受けた物言いとなっており、この「けぢめ」は上と宮が同じ藤壺ゆかりの血筋ゆえに「見えわかれぬほどなるに」という意味に重ねているように見える。というか、そうとしか思えない。であれば、この「なほ残れる雪」とは上を例えたもので<やはり気になるもう一人の紫のゆかり>と言っているように聞こえる。然程の意味は込められてはいないのかもしれないが、「雪」は<白いもの→おしろい→化粧をした女>くらいの語用とも見える。そして、その意図を白居易の漢詩に紛らわせて暗号化しているので、源氏殿と読者以外には真意は悟られない、という仕掛けだ。文脈が通るように暗号を解いて言い換えるが、そうすると丸で私が勝手に辻褄を合わせたかのように見えてしまうという始末の悪さ。此処まで来ると是は殆んど、漢学者を気取る作者の酔狂の趣き。

と忍びやかに口ずさびたまひつつ(と殿は低い声で口ずさみなさりつつ)、御格子うち叩きたまふも(格子戸を叩いて帰りを告げなさると)、久しくかかることなかりつるならひに(久しくこういうことが無かったのに馴れたという事で)、人びとも\*空寝をしつつ(女房たちも殿への反感から寝た振りをして)、やや待たせたてまつりて(少しお待たせ申し上げてから)、引き上げたり(格子戸を引き上げたのです)。\*「空寝(そらね)」は<寝た真似、狸寝入り>。注には<『集成』は「源氏を懲らしめようというつもり」。『完訳』は「女房たちの、源氏への意地悪」と注す。>とある。従って補語する。

「\*こよなく久しかりつるに(この上も無く遅かったので)、身も冷えにけるは(身も冷え切ってしまったのは)、\*懼ぢきこゆる心のおろかならぬにこそあめれ(私が上の身を御心配申し上げる気持ちに怠りが無いからこそなのです)。\*さるは罪もなしや(だから私の遅い帰りも許してくれますよね)」\*「こよなく久しかりつるに」は<私が外に長く待たされたので>と<私が遅い帰りで上を長く待たせたので>との複意だろう。恐らくだが、このような主客語省略で複数の意味に取れる言い方はどの言語にもありそうだ。というのは、言語は共通認識の記号なので、元々の単語自体は多くの場面で多くの人々が意思疎通できるような指示語として本来多くのものを示しうる単純音選ばれている筈で、むしろ混同を許すほどの多様性が無け

れば象徴認識は得られない。なので、よほど注意深く論理規定して使わないと、客観的に特定できる一定概念を表現できない。が、逆にその混同を遊んで概念飛躍を試みる欲求をヒトは持っている、かと思う。ざっと洒落言葉の面白さだが、此処も其だろう。\*「懼ぢきこゆ」は<自分が恐れ入り申上げる>で、是は殿の発言なのだから、源氏殿が紫の上を「怖づ」ということだ。この言葉で、当初は話の運び具合から女房への苦言に見えていた「こよなく久しかりつるに」という言い回しが、俄かに殿の謝罪の言に見えてくる、という奇術めいた作文だ。ところで、「おづ」は<相手の怒りを恐れる>という事だけを意味するわけではない。「おづ」は<失敗を避けたい気持ち>の表明で、基本的には不明な事柄や事態の変化や健康状態に<用心する→心配りする→案じる>という意味、かと思う。\*「さるは」は逆接の<しかし>の語用が多いらしいが、此処では順接の<だから>。「罪もなしや」は<罪は無いですよ=私に非は無いでしょう=許されて当然だ>。

とて、\*御衣ひきやりなどしたまふに(殿が上のお布団をめくりなさんと)、すこし濡れたる御単衣の袖をひき隠して(少し涙で濡れた下着の袖で顔を引き隠して)、うらもなくなつかしきものから(陰も無く優しい顔つきではあるものの)、うちとけてはたあらぬ御用意など(喜んで迎えるというものでもない上の御表情は)、いと恥づかしげにをかし(それは自分の至らなさが恥づかしいほどいじらしい)。\*「御衣ひきやりなどしたまふに」は注に<主語は源氏。「御衣」について、『集成』は「お召し物」。『完訳』は「御夜着」と訳す。>とある。「引き遣る」は<引き除ける、引き剥がす>で、殿が上の「おんぞ」を<払い除ける→布団をめくる>という意味らしい。主客も動詞も分かり難い言い方だ。

「限りなき人と聞こゆれど(最上の貴人たる王家血筋の者と言っても)、難かめる世を(是ほど美しい人は得難いのが現実だが)」

と(と殿は)、思し比べらる(上と宮を思い比べなさいます)。

よろづいにしへのことを思し出でつつ(いろいろと昔の苦労を思い出しなさいは)、とけがたき御けしきを(機嫌の直らないような上の御気持ちに)\*怨みきこえたまひて(殿は同情して嘆き慰め申しなさいは)、その日は暮らしたまひつれば(この日は過ぎしなさいは)、え渡りたまはで(宮のお部屋にはお渡りなされず)、寝殿には御消息を聞こえたまふ(寝殿の宮の御座にはお断り文を申し送りなさいは)。\*「怨みきこえたまひて」の主語は源氏殿だろうから、この「うらむ」は<憎み憤る>ではなさそう。うらむには<悲しみ嘆く>という意味もあるので、上に<同情して共に嘆く事で相手を慰める>というように考えてみる。拡大解釈みたいだが、是が分かり易い。

「今朝の雪に心地あやまりて(今朝の雪に体調を崩しまして)、いと悩ましくはべれば(とても熱っぽくしておりますので)、心安き方にためらひはべる(住み慣れた部屋で休んでいます)」

とあり(とありました)。

御乳母(宮の乳母は)、「さ聞こえさせはべりぬ(そのように宮様にはお知らせ申し上げました)」とばかり(とだけ)、\*言葉に聞こえたり(殿方の使者に口頭でお返事申しました)。\*「言葉に聞こえたり」は注に<「言葉」は口頭での意。本来、宮自筆の手紙があってしかるべきという含み。>とある。従う。

「異なることなの御返りや(何の情趣も無いお返事だな)」と思す(と殿はお思いになります)。「院に聞こし召さむこともいとほし(朱雀院が宮の夜離れをお知りになるのが具合が悪い)。この

ころばかりつくろはむ(せめて此処暫くだけは形だけでも通わないと)」と思せど(とお思いになるものの)、えさもあらぬを(早くも途絶えてしまつては)、「さは思ひしことぞかし(予想はしていたことなんだよな)。あな苦し(実に困った)」と、みづから思ひ続けたまふ(御自分で思い続けなさいます)。

女君も(上も殿の宮への途絶えを)、「\*思ひやりなき御心かな(配慮の足りないお考えだこと)」と、苦しがりたまふ(自分が殿を引き止めたように思われては立場が悪くなると、迷惑がりなさいます)。「\*思ひやり」は殿の<宮への同情=愛情=配慮>と<事態の理解=洞察=配慮>との複意。洒落言葉の軽妙な筆致ながら、そのまま上の複雑な胸中を表す。このところ、作者はノッているのだろうか。当時の読者はこの才気ある語り口を自然に楽しんだのかもしれないが、今となつては、それも私如きには、そのほとぼしりは少し荷が重い。注には<紫の上の心中。『集成』は「紫の上が引き止めているのではないかと、誤解される立場にあることを察してほしいと思う」。『完訳』は「自分が源氏を引き止めていると誤解されるのを恐れる」と注す。>とある。何れ、殿の<配慮が足りない>ので、上の「苦しがりたまふ」が<迷惑がりなさいる>となる。

#### [第七段 源氏、女三の宮と和歌を贈答]

\*今朝は(この日の朝は)、例のやうに大殿籠もり起きさせたまひて(六条院は普段どおり東の対の自室でお休みになりお起きあそばして)、宮の御方に御文たてまつれたまふ(寝殿の宮の御部屋にお手紙を差し上げなさいます)。「\*けさ」は注に<結婚後五日目の朝。昨日は気分の悪いことを理由に女三の宮のもとに出かけず、紫の上方に一日過ごしたその翌朝。「例のやうに」と語られている。>とある。「例のやうに」は確かに気になる言い方だ。与謝野訳文には「これまでのとおりに」としてある。渋谷訳文では「いつものやうに」とある。どちらにしても、源氏殿が三の宮との結婚を無かつたことにしたい、という気分が伝わってくるような語感だ。が、そういう解釈で良いのだろうか。といて、私に別の上手い説明が思い付く訳ではないが、以前から「例のやうに」は<いつものやうに>と言い換えても、何か言い切れて居ないというか、言い残しがあるやうな、残尿感らしき気持ちの悪さがあることが多くて、此処でもスッキリしない。

ことに\*恥づかしげもなき御さまなれど(特に格式張った御書式ではないが)、御筆など\*ひきつくろひて(御文字の書きっぷりなど恋文らしく優雅になさつて)、\*白き紙に(雪のように白い紙に)、「\*恥づかしげもなき御さま」は注に<『完訳』は「気の張らない、姫宮の幼稚さ」と注す。>とある。『完訳』の解釈では、「御」は姫宮に対する尊称らしい。与謝野訳文も「御さま」は宮のことに取っている。渋谷訳文では明示を避けている。私は、この文の話題は「御文」に見えるので、この「おんさま」は<御手紙の体裁>だと思ふ。さて、「恥づかしげ」だが、「御さま」が宮様なら此処で<恥づかしそう>かどうかを形容する意図は意味が無いので<こちらが思わず身構えるほど美しく立派だ>という意味であり、「御さま」が手紙の体裁なら<恥づかしそう>というのは成立しない形容なので<畏まっている、格式張っている>という意味になる。ところで、宮は既に殿から「いとあまりものの榮なき御さまかな」(第二段)との評価を下されてるので、今更に<ことに立派ではない>と此処に重ねて持ち出しては、手紙を書く気が削がれるだけだ。むしろ殿は、そこには目を瞑つて礼儀を重んじて御文を送るのだろう。私には<「御さま」=姫宮>は同意出来ない解釈だ。「引き繕ふ」は<取り成す、場を取り繕う>。恋心は無いが、恋文のやうに見せる、ということなのだろう。だから、「御筆(おんふで)」は選りすぐりの筆ではなしに、書面の恋文らしい<文字の形、筆跡>なのだろう。「\*白き紙」は注に<季節や天候の白梅や雪による趣向。>とある。確かに殿は前段で、「闇はあやなし」と梅を思い、「なほ残れる雪」と朝の庭を見た、がそれらは紫の上を例えたもので宮はダシに過ぎなかつた、かと思ふが。

「中道を隔つるほどはなけれども、心乱るる今朝のあは雪」(和歌 34-07)

「意地悪とまで言わないが、今朝はあいにく罪な淡雪」(意識 34-07)

\*注に<源氏から女三の宮への贈歌。「乱るる」は「心乱るる」と「乱るるあは雪」に掛かる。「かつ消えて空に乱るる淡雪はもの思ふ人の心なりけり」(後撰集冬、四七九、藤原蔭基)を踏まえる。>とある。「淡雪」は軽い雪。大降りではないから積もり残る前に溶け消え易い。が、ボタ雪ではなく低温で乾いているので一つ一つは溶け難い。その未練がましさと無風の空にふわりふわりと舞い降りる風情にヒトは思い入れる。引歌にある通りだが、是が詠まれる前から「あはゆき」の音には<ああ何という、可愛ゆい、危うい、怪しい>としみじみ感じ入る語感がある。「淡雪」はそういう言葉だ。「なかみち」は<恋する二人が思いを通わず道=恋路>ということらしい。今でも通じる言い方だろう。「ほど」は<程度>でもあり<性質、効果>でもある。「ども」は<何かが~でも、他方は異相だ>という状況解説の語用と<たとえ~でも、必然する>という無効条件の語用がある。なので、「中道を隔つるほどはなけれども」は<仲を邪魔するほどではないが>ではなく<仲を邪魔するものではないとしても>だ。

梅に付けたまへり(と殿はお詠みになって、梅の枝に結び付けなさいました)。

\*人召して(事情の分かる女房を使者にご指名なさって)、\*「ひと」と一般名詞だが、御文に使者を立てるのは別段断るべき事柄ではないので、此处であえてこういう説明文を書く意味は、この「人」が特定の人物を指名したことを示している、ように見える。

「\*西の渡殿よりたてまつらせよ(この御文は西の渡殿の局の彼の乳母に届けて、彼の者から宮に奉らせるように)」 \*注に<源氏の詞。西の渡殿の女房の局から差し上げるようにとの伝言。>とある。是は歌文の「中道を隔つるほどはなけれども」を<東の渡廊下から行き来出来ない不都合があるわけではないが、西側から差し上げます>という意味で洒落る為の一工夫として、直接寝殿に届けて其処の女房に取り次がせるのではなく、わざわざ「西の渡殿」へ届けさせるものかと思うが、この「西の渡殿」も使者の任意の誰かで良い筈はなく、当然に殿が指名した特定の宮の乳母なのだろう。実際には、当の乳母は寝殿の宮近くに侍っていて、局には居ないのかも知れないが、それこそ宮側の中臈に取り次がせれば良い話だ。

とのたまふ(と仰います)。

\*やがて見出だして(そして殿はそのまま庭に目を遣って)、端近くおはします(縁側近くにいらっしやいます)。 \*「やがて」は<そのまま>の意で、現代語の<暫く経ってから、ややあって>とは違う。「見出だす」は<中から外を見る=部屋から庭を見る>の意で、現代語の<探し出す、見つけ出す>とは違う。こういう文は古文に馴れていない私には存外難解だ。また、庭は外を感じる南庭かとも思うが、寝殿に面した中庭の手近さも興味がありそうで、保留する。

白き御衣どもを着たまひて(白い着物を重ね着なさって)、花をまさぐりたまひつつ(枝先の梅の花に触れなさりながら)、「\*友待つ雪(仲間が恋しげな雪)」のほのかに残れる上に(がうっすらと白い花の地色と見分けが付き難いくらいの控え目さで消え残っている上に)、うち散り添ふ空を眺めたまへり(新たに降り積もる雪が舞い降りる空模様を眺めていらっしやいました)。 \*「友待つ雪」は注に<「白雪の色わきがたき梅が枝に友待つ雪ぞ消え残りたる」(家持集、二八四)を踏まえた表現。>と引歌参照がある。

鶯の若やかに(鶯が若々しい声で)、近き紅梅の末にうち鳴きたるを(直ぐ近くの紅梅の木末で鳴いているのを見て、未熟な鶯は匂いで止まり木に迷うという古歌を思い出して)、

「\*袖こそ匂へ(袖に匂いを移そう)」 \*注に<源氏は「折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやここに鶯の鳴く」(古今集春上、三二、読人しらず)の歌を想起して、梅の枝を鶯から隠すしぐさをする。>とある。「梅の枝を鶯から隠す」とは下の「花をひき隠して」のことだろうか、意味不明の注だ。「ひき隠す」は<袖で覆うように抱え持つ>。で、引歌は<折った梅の花を抱え持つと袖まで匂いが移って鶯が間違えて袖に止まって鳴く>という歌筋だ。だから、歌の「袖こそ匂へ」は<袖こそ匂へば=袖まで匂いが移ったので>だが、此处では<袖こそ匂へと=袖に匂いを移そうと>と意味をずらして洒落ているのだろう。むしろ、上の「うち鳴きたるを」に古歌想起を補語したい。「若やかに」のフリも効く。

と花をひき隠して(と手折った梅の枝を袖に抱え持って)、御簾押し上げて眺めたまへるさま(御簾を押し上げて庭を御覧になっている所は)、夢にも(まさか)、かかる人の親にて(皇太子妃の親にして)、重き位と見えたまはず(准上皇という重い地位にある方とはお見えなされません)、若うなまめかしき御さまなり(若く瑞々しい御姿です)。

御返り(宮からの御返歌は)、\*すこしほど経る心地すれば(少し時間が掛かる様子なので)、入りたまひて(殿は母屋に入りなさって)、女君に花見せたてまつりたまふ(紫の上に手折った梅の花をお見せ申しなさいます)。 \*「すこしほど経る心地」には<長く待たされる不満>を感じる。注にも<返事が遅いのは好ましいことではない。女三の宮の欠点。>とある。ただ、返事が遅れること自体にはさまざまな事情が有り得るので、これが直ちに素養や才気の無さを示すとは言えないだろうが、寝殿と対屋との距離で殊更に返事に手間取る事情も無ければ、少なくとも礼儀を欠く世慣れていない対応振りは示している。

「\*花といはば(花というものは)、かくこそ匂はまほしけれな(この梅のように匂ってほしいものだ)」。 \*この文は、注に<以下「心分くる方なくやあらまし」まで、源氏の詞。紫の上の機嫌をとる。>とある。ということは、源氏殿は<香り高い梅の花に紫の上を例えている>ということだろうか。いや、多分そうなのだろうとは私も思うので、そのように注記して欲しい。何故<例えている>という説明無しに「機嫌をとる」とだけ記すのか。他意の存在が疑われて非常に不満だが、私は<上を梅に例えている>という解釈で読み進める。と当然に、下の「桜」を比較対照として<宮を桜に例えている>と読むことになる。と、「移す」は<梅の匂いを桜に移す>という意味ではなく、話題の対象を<梅から桜に移す>となる筈だ。こうした先走りノートは遺憾だが、続き文なので止むを得ない。そういう文脈として以下を読み進む。

桜に移しては(桜に目を移してみると、匂いに付いては)、\*また塵ばかりも\*心分くる方なくやあらまし(全く塵ほども見所は無いかと思う)」 \*「また」は強調の副詞なのだろう。「また塵ばかりも～やあらまし」で<全く塵ほども～ということはないように思う=ほんの僅かも～ではあるまい>。 \*「ころ」は<意味=価値>。「分く」は<理解する、認める>。「心分くる方」は<価値が認められる部分=見所>。

などのたまふ(などと殿は仰います)。

「これも(この梅の花も)、あまた移ろはぬほど(多くの他の花に目移りしない春の早い内に咲くので)、目とまるにやあらむ(目に付くのかも知れませんか)。\*花の盛りに並べて見ばや(百花繚乱の春の盛りに見比べたら、格別に魅力が在るのかどうか分かりません)」 \*「花の盛りに並べ



て見ばや」は注に<『完訳』は「桜の盛りに、桜と白梅を。暗に女三の宮と紫の上を並べたら好一对になろう、の意。このあたり、紫の上が応じない源氏の独り相撲」と注す。>とある。私の解釈とほぼ等しい指摘の注、と取って良いのだろうか。何でこの注釈はこんな分かり難い言い方をするのである。いやしかし、どうも渋谷訳文は上の二つの発言を両方とも源氏殿の弁としているかの節がある。ただ、現代語に言い換えている筈なのに渋谷訳文は主語省略のままだったり、補語が無かったりする文が多く、此处でも主語省略のままなので解釈自体に客観的な明示努力が無く、つまり訳文にも関わらず主語がはっきりしない。一方、与謝野訳文は主語明示や補語に努めていて、責任ある姿勢に敬服するが、この二つの発言文でも前の主語を源氏殿に、後の主語を紫上に決定してあって、私もその点では従いたい。ただ文意に於いては、私とは相当な解釈の違いが有り、その点では従えない。私が納得出来た文意は言い換え文に示した通りだが、此处の原文は分かり難いので自信は然程持てない。その上に、先人たちの混乱ないし説得力の無さと来ては、本当に心許無いが、先に進む。

などのたまふに(などと紫の上がお応えなさる内に)、御返りあり(宮からの御返歌が届きました)。\*紅の薄様にあざやかにおし包まれたるを(赤い光沢紙に公然と几帳面に折包まれたその御返書に)、胸つぶれて(殿は恋文の遣り取りの体無しと失望して)、御手のいと若きを(またその書かれた御文字の稚拙さを)、\*「くれなゐのうすやう」は<紅色の薄手の鳥の子紙。>と大辞泉にある。「とりのこがみ」は<雁皮(がんび)・ミツマタを主材料とした上質の和紙。鶏卵の殻のような色をしていることからの称。>と大辞林にあり、古語辞典には<平滑で光沢もある。>とある。ざっと、赤い光沢紙なのだろう。「呉藍」をベニバナの赤と見れば、王家血筋つながりの末摘二号の趣もあるが、さすがに三の宮は上皇の皇女なれば、廢れた常陸宮家と比べては失礼か。「あざやか」は<派手だ、華やかだ、はっきりしている>で、恋文の信書らしき忍びやかさではなく、人目憚らぬ公然さ、なのだろう。「押し包む」は<角張って几帳面に堅苦しく包む>。となると、「紅の薄様にあざやかにおし包まれたる」は裳着前の女兒めいた愛らしい包装で、その恋文としての奇異さに殿は思わず「胸つぶれて(失望して)」しまったらしい。この晩年になって、子供の遊び相手を仰せ付かるとは。いや、仕込み甲斐を感じる相手なら、その幼さも無垢の愛くるしさだ。が、見所の無いガラス細工は触れることすら手に余る。それを引き取った負担感も自業自得。全てはゲーム参加者の責任だ。

「しばし見せてまつらであればや(是は当分は上にはお見せしないで置けないものかな)。隔つとはなけれど(隠し立てする心算はないが)、あはあはしきやうならむは(宮の手紙を軽々しく他人に見せるのは)、人のほどこたじけなし(その身分に畏れ多い)」

と思すに(とお思いになるが)、ひき隠したまはむも心おきたまふべければ(側居して殿が隠れ読みなさるのも上が不審がり為さるだろうから)、かたそば広げたまへるを(殿が半身で文を広げなさるのを)、しりめに見おこせて添ひ臥したまへり(上は横から覗き込んで隣に添い臥しなさいました)。

「はかなくてうはの空にぞ消えぬべき、風にただよふ春のあは雪」(和歌 34-08)

「忘れ去られて消えるかと、この淡雪の頼り無さ」(意識 34-08)

\*注に<女三の宮の返歌。「あは雪」の語句を受けて、それを我が身に喩えて返す。『集成』は「乳母たちの代作であろう」と注す。>とある。「代作」の可能性は相当程度にあるとは思いますが、「代作であろう」という言い方だけではあまりにも不親切で、証拠を出せとまでは言わないが、それを言う根拠を示さないと非常な傲慢さを感じる物言い

だ。私なりに斯う思う。この返歌は、殿の贈歌が「かつ消えて空に乱るる淡雪はもの思ふ人の心なりけり」（後撰集冬、四七九、藤原蔭基）という引歌を踏まえていることを理解して、しかし、その引歌の歌意のままを「空に乱るる」を「うはの空にぞ」に言い換えて返歌としている。つまり、技巧に終始した歌詠みに見えるので、幼い宮に似ず、相当に「代作」っぽいのだ。また、贈歌は「中道を隔つるほどはなけれども心乱るる今朝のあは雪」であり、引歌を踏まえたと言っても殿の工夫は「中道を隔つるほどはなけれども」にあるのであり、その意図を明示して、わざわざ「西の渡殿よりたてまつらせ」たほどだが、それを宮が読み取った手応えがない。何とか「隔て」は詠み返すべきだったのではないか。是が例えば「隔てなければかなくて、うはの空にぞ消えぬ淡雪」だったら、技巧なりにも遣り取りが成立しそうだが。邪魔が無くても頼り無い、上の空にも消える淡雪。いや、無粋の方が恨みは籠もるか。

御手(上の目にも宮の御筆跡は)、\*げにいと若く幼げなり(なるほどとても不慣れで幼稚でした)。 \*注に<紫の上の視点から語った表現。「げに」は前に「御手のいと若きを」とあったのと呼応。紫の上の感想。>とある。従う。

「\*さばかりのほどになりぬる人は(くれぐらいの年になった人は)、いとかくはおはせぬものを(とてもこのように稚拙ではいらっしやらないものを)」と、目とまれど(目に付いたが)、見ぬやうに紛らはして(見なかったことにして)、止みたまひぬ(上はそれ以上読むのをお止めなさいました)。 \*注に<紫の上の感想。>とある。従って補語する。

異人の上ならば(他の人のことならば)、「\*さこそあれ(あの人はこの程度だ)」などは(などの評価は)、忍びて聞こえたまふべけれど(殿も上に身内話として為さろうけれども)、いとほしくて(宮の御身分に障るので)、ただ、 \*「さこそあれ」は注に<源氏の詞。『集成』は「こんなに下手だ」。『完訳』は「この程度なのです」と訳す。>とある。またもやだが、相変わらずの主語変化の分かり難さには、慣れる自信が全く無い。この言い回しの解釈は『完訳』に従う。

「\*心安くを(宮には親切な付き合いを)、思ひなしたまへ(心掛けてくれ)」 \*「心安し」は<安心だ、気楽だ>の他に<親しい、近い>の意もある。「思ひ做す」は<～のように考える、～と見做す>。「思ひなしたまへ」は<思い込んで良い>ではなく<心掛けて下さい>という言い方に見える。「心安し」を心掛けたら、それは<安心>ではなく<大きく構えた余裕ある対応>なのだろう。ざっと、親切にしてやってくれ、みたいな言い方かと思う。

とのみ聞こえたまふ(とだけ申しなさいます)。

[第八段 源氏、昼に宮の方に出向く]

今日は(この日に殿は)、宮の御方に昼渡りたまふ(姫宮の御部屋に日中お出掛けなさいます)。心ことにうち化粧じたまへる御ありさま(特に念入りに身支度なされた殿の御姿を)、今見たてまつる女房などは(この日初めて拝し申し上げる宮付きの女房などは)、まして見るかひありと思ひきこゆらむかし(話以上に素晴らしいと思ひ申すことでしょう)。

御乳母などやうの老いしらへる人びとぞ(しかし、御乳母などのような年老いた人たちは)、

「\*いでや(いやいや)。この御ありさま一所こそめでたけれ(この院のご立派さは対の上一人だけに恵みあるもので)、めざましきことはありなむかし(宮様にはきっと、心外な出来事が起こるに違いない)」 \*「いでや」は注に<以下「めざましきことはありなむかし」まで、老乳母の心中。源氏の立派さに対し、女三の宮の未熟さを熟知するので、将来の夫婦関係に、紫の上よりも寵愛が劣ることになるのではないかと、懸念する。>とある。ということは、「御ありさま」は<殿の御立派さ>で、「ひとところ」は<紫の上>で、「めでたし」は<映えある>、をそれぞれ意味する、ということなのだろう。従う。

と、うち混ぜて思ふもありける(中には思う者も居たのです)。

\*女宮は(妻の座にある姫宮は)、いとらうたげに幼きさまにて(とても無邪気な幼い様子で)、御しつらひなどのことごとく(室内装飾が豪華で)、よだけくうるはしきに(格調高い美しさの中に)、みづからは何心もなく(自身はそれらに関心もなく)、ものはかなき御ほどにて(小柄な御体格で)、いと御衣がちに身もなく(御着物が目立って本人は目立たず)、あえかなり(線が細い)。ことに恥ぢなどもしたまはず(特に恥ぢかしがりも為さらず)、ただ稚児の面嫌ひせぬ心地して(ただ幼児が人見知りしないような面持ちで)、心安くうつくしきさましたまへり(他愛もなく大事にされていらっしゃいます)。 \*「をんな」という呼び方は、語り手による話題主体をして、男の情交相手としての指摘意図を意味する、とのこと。以前にもノートしたが、たとえどんな晩生の姫であろうと、男に抱かれた後には変化がある筈で、いよいよその点が語られるのかと非常に興味深い。また、此处の文は最近にしては比較的分かり易い語り口だ。尤も、単語は辞書で意味を確認する必要のある物がいくつかあったが、それも全くの初見の物も無かった。だというのに、此处の文意にある相変わらずの幼さ一辺倒の説明は、私は了解し難い。宮は裳着前の幼女ではなく14歳の妻だというのに。それでも、いくらなんでも、さすがにこの作者がずっとこのままの説明を続けるとは思えないから、今後の展開を楽しみに、此处は一先ず作者の語りを、その情趣あるであろう口調と意図に注意しながら聞くだけは聞いて置く。

「院の帝は(朱雀院は)、ををしくすくよかなる方の御才などこそ(客観的に論理構築する漢学などこそ)、心もとなくおはしますと(お好きではなくいらっしゃると)、世人思ひためれ(一般の人は思っているようだが)、をかしき筋(芸事の面で)、なまめきゆゑゆゑしき方は(風情のある由緒ある作法に付いては)、人にまさりたまへるを(人一倍詳しくいらっしゃるものを)、などて(どうして姫宮を)、かくおいらかに生ほしたてたまひけむ(こうも無教養にお育て申しなさったのだろう)。さるは(この姫宮は)、いと御心とどめたまへる皇女と聞きしを(特に朱雀院が大事に御思い為さった皇女だと聞いていたが)」

と思ふも(と思うのも)、\*なま口惜しけれど(その仕付け不足が残念だったが)、\*憎からず見たてまつりたまふ(殿は宮を疎ましくもなく思い申しなさいます)。 \*「なま」は<未熟、不十分、中途半端>。此处では宮の仕付け・仕込みが<不十分>。 \*「憎からず見たてまつりたまふ」は<可愛いと思ひ申しなさる>も分かり易い言い換えに思う。ただ、これまでの語りでは、宮に期待していたほどの魅力が無く、殿は存外の稚拙さに失望した、とされていたものが、漸く此处に来て話が少し違う方向に動き出した、と思うので、その転換を<疎ましくもなく>という言い換えで示したかったし、原文の「憎からず」も話の別展開を導く語用なのだろう。

ただ\*聞こえたまふままに(ただ殿の申しなさるままに)、なよなよとなびきたまひて(身を任せて愛撫を受けなさって)、御いらへなどをも(体を触られる気分や殿の道具などを見て触れた印象

などへの殿のお尋ねにお返事申しなさることなども)、おぼえたまひけることは(感じ為さった事は)、いはけなくうちのたまひ出でて(無邪気に隠さず口になさって)、え見放たず見えたまふ(宮は手助けせずには居られない未熟さにお見えになります)。 \*「聞こえたまふままに」はく主語は源氏。 >と注にある。確かに分かり難い。敬語表現と文意から、「聞こえたまふ」のが源氏殿で、「なよなよとなびきたまひて」が三の宮なのだろうとは見当付けるが、「聞こえたまふ」の中身が何を示すのかが分からないので直感的な理解に至らない。とはいえ、此処の行は「女宮」という言い方で、閨での事柄を説明しているのだから、その場面らしい一通りの補語で理解に努める。と、姫は、物言わぬ人形だった未摘とは違って、男をそそる女の姿態を見せたり、男を敬う演技を見せたり、こそはしなかったものの、その性反応は未開発で鈍感気味ではあったにしても、それだけに無垢の率直さを素直に示していたようだ。今なら、男は可愛いと思った女と結婚するものという観念が強いので、こういう一種の処女性は妥当性が広く認められているようだが、当時の貴族(といっても限定的な意味ではなく、今のマスコミ概念と対比する意味の例示で、むしろ此方が一般的かも知れない)の男は、結婚相手を先ず社会的価値で選び、次に自分の教養に基づく生活感との釣り合いを歌詠みで確かめる。当然、顔立ちや体つきなども互いに大きな関心事だが、色事と婚姻契約の一致を社会制度は前提としていないし、保証しない。現在の法体系でも、子育て環境の維持は婚姻契約上の努力義務とされているだろうが、そして貞操の堅持も契約相手との信義に関わる礼儀として尊重されるだろうが、相手を受そうと憎もうと興味を持とうと失おうと、気持自体に義務は課せないし、気持ちの変化などによって約束が無効になっては困るから、当事者間で主たる事項の社会的な権利と義務に付いての同意を取り決めるわけだ。婚姻の本質的な意義付けは古今東西変わらないだろう。そもそもヒトは、可愛いと思う心理作用を雌雄結合行動に駆り立てる大きな動機付けとして物質分子設計されている有機生命体なので、その心理はその時点の環境に誘発されて作用するもので、絶対的な価値や価値観に基づいて発動される機関作用などではない。だから、可愛いと思った相手と結婚するもの、という観念は根源的な形態を説明するものではなく、むしろ閉じた世界で誘発された心理の結果に過ぎず、それを教条として崇めるのは妄想の類で、一種の精神病だ。恋愛は興奮状態だが、結婚は生活上の協力体制なので、冷静に相手との適性を調べるべきだ。しかし、未来には何一つとして成功の保証は無いので、いくら調べても予測できる失敗を回避するのが精一杯で、その協力体制に幸福は約束されていない。実際、男女の仲は危ういし、危ういからといって社会機構が機能しないのでは各個および全体の人間生活が成り立たないので、組織維持の基本である子育て(即ち世代継続)の経済的機構形態である婚姻契約を結ぶに当たっては、性愛事項は公式には無視される。というわけで、婚姻制度上は見栄えの良し悪しを表向きの婚姻条件に出来ない。そして、経済支援が女持ちとされる女系社会に於いては、結婚の決定権は女というか女側の家の男主人にある。しかし実質では、社会で財を得る地位を競う男を家に繋ぐ事項は食事と性愛なので、娘に対するそれらの仕込みは女側の家の特に女主人の考え方に委ねられる。井戸端会議は非常に重要な社会機構だった。従って、こうした宮の処女性を面倒に思うか愛しむかは、実際には実に微妙な事項なのだろう。

\*昔の心ならましかば(理想ばかりを追い求めていた、昔の考えであつたら)、うたて心劣りせましを(こうした宮の未熟さに嫌気してがっかりしただろうが)、今は世の中を(今は世の中というものを)皆さまざまに思ひなだらめて(元々それぞれは多様なものと穏やかに考えて)、 \*「昔の心」とは文意からすると<理想ばかりを追い求めていた>ようなので、そう補語する。

「とあるもかかるも(彼は言っても)、際離るることは難きものなりけり(際立った逸材というのは得難いものだ)。とりどりにこそ多うはありけれ(欠点を言い出せば、色々と多くあるものの)、よその思ひは(宮に結婚を申し込んだ他の男たちからすれば)、いと\*あらまほしきほどなりかし(宮を妻に迎えることはどれほど光栄なことか)」 \*「あらまほしきほど」はく理想的なこと>だから、そ

れは殿が宮を妻に迎えたことが、なのだろうし、そう思うであろう「よその思ひ」とは、藤大納言や右衛門督などの  
<宮に結婚を申し込んだ他の男たちの思ひ>に違いない。

と思すに(とお思ひになるにつけても)、差し並び目離れず見たてまつりたまへる年ごろよりも  
(一緒に暮らして見慣れ申したこの数年来に増して)、対の上の御ありさまぞなほありがたく(対  
の上のこの度の御態度が更にご立派で)、「われながらも生ほしたてけり(我ながら良く仕込み上  
げたものだ)」と思す(とお思ひになります)。

一夜のほど(宮を抱いて寝たこの一夜から)、朝の間も(朝にかけての間も)、恋しくおぼつかなく  
(上が恋しく気懸かりで)、いとどしき御心ざしのまさるを(こみ上げる御愛情が強まるのを)、  
「などかくおぼゆらむ(どうしてこんな気になるのだろう)」と、ゆゆしきまでなむ(殿は不吉に  
さえ思ひなさるほどなのでした)。

#### [第九段 朱雀院、紫の上に手紙を贈る]

院の帝は(朱雀院は)、月のうちに御寺に移ろひたまひぬ(この二月の内に修行の御寺にお移り  
になりました)。この院に(朱雀院から六条院に)、あはれなる御消息ども聞こえたまふ(入山する  
に当たって後に残す世俗の気懸かりな事情を何通かお遣しなさいます)。姫宮の御ことはさらなり  
(姫宮の御ことも当然あります)。

わづらはしく(難しく)、いかに聞くところやなど(私がどう思うかなど)、憚りたまふことなく  
(気遣いなさることなく)、ともかくも(何にしても)、ただ御心にかけてもてなしたまふべくぞ  
(ただお忘れなく姫宮のお相手をして頂けたらと)、たびたび聞こえたまひける(朱雀院は六条院  
に御文でたびたびお願い申しなされたのです)。されど(そうは言っても)、あはれにうしろめた  
く(朱雀院は宮が本当に心配で)、幼くおはするを思ひきこえたまひけり(幼くしていらっしゃる  
のを案じ申しなされている文面なのでした)。

紫の上にも(紫の上に宛てても)、御消息ことにあり(お手紙が別にありました)。

「幼き人の(若い娘が)、\*心地なきさまにて移ろひものすらむを(分別も付かない有様で移り住  
んでおりますのを)、罪なく思しゆるして(悪気は無いものとお思い頂いて)、後見たまへ(御世話  
下さい)。\*尋ねたまふべきゆゑもやあらむとぞ(この者は先祖を尋ねれば貴方の血縁者かとも存  
じますので)。\*「ここちなし」は<分別が無い>。 \*「尋ねたまふべきゆゑ」は注に<紫の上と女三の宮は先帝  
の孫、紫の上の父式部卿宮と女三の宮の母藤壺女御は異母兄妹の関係。すなわち、従姉妹同士であることをいう。  
>とある。従って補語する。

背きにしこの世に残る心こそ、入る山みちのほだしなりけれ (和歌 34-09)

残す娘の行く末が、正直言つて気懸かりです (意識 34-09)

\*注に<朱雀院から紫の上への贈歌。女三の宮が気ががりであるという感懐を詠む。「この世」に「子」を懸ける。  
「世の憂き目見えぬ山路に入らむには思ふ人こそほだしなりけれ」(古今集雑下、九五五、物部良名)を踏まえる。

>とある。作者とされる「もののべのよしな」が如何にも胡散臭いので、早速に「古今和歌集の部屋」サイトを頼ると、この引き歌は「同じ文字なきうた」と詞書されている、とある。参照ページの解説にも「この歌は雑歌下にあるが、詞書に「同じ文字なきうた」とあるように～中略～言葉遊びが歌を作る動機になっていると思われる。それを考えると「物部吉名」という名前も、はじめと最後を合わせると「物名」になるので、あやしいと言えばあやしい。」とあり、「物部吉名」が<物凄く良く出来た一首>に聞こえる。確かに、同じ文字の重複無しに単語と歌筋の成立が無理なく見事に図られていて、大喜利の言葉遊びの一言で括るにはあまりに出来過ぎた、歌を捻るという言葉遊びが新たな概念を生み出すという、歌詠みの真髓を示す古典の趣だ。だから、この歌が結果として「同じ文字なきうた」になっていたのか、「同じ文字なきうた」を発題されて考案したものか、ではいくらか印象が違うが、この歌は古今和歌集では雑歌下に編集されていることから、成り立ちは前者ないし少なくとも題示例が不明の古歌で、編集者がこの歌を「同じ文字なきうた」と面白がって作者を「物部吉名」と洒落た、ような気がする。では、当歌ももしや、と気色ばんだが、「こころこそ」だけで「こ」が三重していて、さすがに娘を案じる歌詠みなれば洒落が趣旨ではなさそうだ。しかし、当歌は引歌の歌筋だけを踏襲しているのではなく、言葉遣いも真似ているので、この引歌を下敷きにしていることを敢えて強調しているように見える。其処に紫の上の「罪なく思しゆるして」頂ける寛大さを期待する親心を滲ませた、と見るのは穿ち過ぎだろうか。しかし、そうでなければ当歌は歌筋自体からは歌意というほどの込めた思いは伝わらない。あるのは正直な親心だけだ。三十一文字の短歌形式に心境を載せただけなら語呂遊びの独詠歌だ。贈歌として成立しない。引歌は古典の趣きなれば、きっと紫の上にも通じたことだろう。

\*闇をえはるけで聞こゆるも(子育てに迷う親心の、闇を払えずに申し上げるのも)、をこがましくや(愚かしいのですが) \*「やみ」は注に<「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」(後撰集雑一、一一〇二、藤原兼輔)による。>とある。「はるけ」は「晴るく(払い除ける)」の連用名詞で<払い除けること、払い除けた状態>。動詞の前の「え(得)」は<出来ない>という不可能を示す語用。現代語に無い語用なので理屈は面倒だが、「闇をえはるけで聞こゆるも」は音感で<闇を払えずに申すのも>という意味が伝わるような気もする。

とあり(とありました)。大殿も見たまひて(源氏殿もこのお手紙を御覧になって)、

「あはれなる御消息を(切実な御気持ちですね)。かしこまり聞こえたまへ(畏まって承りましたとお応え申しなさい)」

とて(と上に仰って)、御使にも(御文遣いにも)、女房して(女房に接待させて)、土器さし出でさせたまひて(酒を注がさせ為さって)、しひさせたまふ(何杯も勧めさせなさいます)。

「御返りはいかが(どのようにお返事したものか)」など、聞こえにくく思したれど(上は書きにくくお思いになったが)、ことごとしくおもしろかるべき折のことならねば(取り立てて風雅に遊ぶべき場合の歌ではないので)、ただ心をのべて(ただ理解を示して)、

「背く世のうしろめたくは、さがたきほだしをしひてかけな離れそ」(和歌 34-10)

「気に掛かるならむりむりに、忘れなくても良いのかと」(和歌 34-10)

\*注に<紫の上の返歌。「背きにし世」「ほだしなりけれ」を受けて「背く世」「ほだしをしひてかけな離れそ」と切り返して返歌する。『完訳』は「贈答歌の、相手を切り返す返歌の作法によりながら、朱雀院の出家に対して批

判的な気持もまじる」と注す。>とある。問題は、「ただ心をのべて」をどう取るかだ。この「ころ」は「ことごとしくおもしろかるべき折のことならねば」という条件に規定されている。もし、「心を伸ぶ」が<気持ちを述べる>なら、気持ちを込めた歌詠みは「ことごとしくおもしろかるべき折のこと」なのだから規定に反する。だから、この「心を伸ぶ」は<理解を披瀝する>という意味なのだろう。であれば、『完訳』の言う「批判的な気持もまじる」は外れていて、むしろ「相手を切り返す返歌の作法によりながら」も「朱雀院の出家に対して」<同情を示した>ものかと思う。

などやうにぞあめりし(などというようにあったようです)。

女の装束に細長添へて\*かづけたまふ(六条院は御文遣いに用足しの褒美として、女物の衣類に細長い飾り布を添えてお与えなさいます)。\*御手などのいとめでたきを(遣いの持ち帰った御返事に、上の御筆跡のととも見事なのを)、\*院御覧じて(朱雀院は御覧になって)、何ごともいと恥づかしげなめるあたりに(このように何につけてもとてもご立派に見える紫の上が居らっしゃる六条院に)、いはけなくて\*見えたまふらむこと(姫宮があどけなくいらっしゃることを)、いと心苦しう思したり(とても気詰まりに御思いなさいました)。 \*「かづけたまふ」の主語は源氏殿。 \*「おんて」の「御」は上への敬称。 \*「院」は朱雀院。 \*「見えたまふ」の主語は姫宮。